

旅行記

台湾紀行

阿部靖夫（会員）

ここ台湾台中市谷関温泉に滞在3日目、台北に移動する日となった。

連日の雨も上がって、朝からピーカン！初夏の日差しが窓から差し込んで眩しい。

昨日雨天の中、友人故藤井隆氏三回忌法要がつつがなく終り、日本から持ち込んだ線香の香りが指先に残る。龍谷大飯店駐車場では、台湾旅行客が大型バスに次々乗り込む姿に、なぜか余裕が感じられる。

ホテルロビーの表から駐車場に繋がる広場では、台湾桃を売るたくさんのダンボール箱がロビーの手前まで連なっている。5月下旬の今ごろが台湾桃のシーズンだったか！小粒な桃であるので、後で何処かで食べられるだろうとの思いからか、触

手を伸ばすにいたらず見過ごしてしまった。やはり食べてみれば良かったと後悔する。

ロビーから駐車場を通り前面は東西縦貫道である。その両側が谷関温泉の飲食店街になっている。「捎来歩道の先に、原住民との衝突で亡くなった日本人



谷関温泉飲食店街

士官の墓がある」と云う台湾電力誌の大甲溪発電所区域歴史調査資料の翻訳文の結び言葉が気になり、観光看板で確認しながら捎来道路を探す。

この谷関温泉は原住民タイヤル族の街である。台中市内から東へ約60km台中市和平区博愛里にある大甲溪谷に開かれた小さな街だ。海拔約750m、標高1000mを超えた山々に囲まれ、ここから先は3000m級に連なる中央山岳地帯。谷関温泉名物の吊橋を起点に東西縦貫道路が梨山を経由して花蓮まで延びている。

しかし、1999年9月21日の台湾中部大地震とそれに追い討ちをかけた大型台風で、トンネルや道路がズタズタに寸断破壊されたため、18年が経過した今でも漸く片側通行ができるまでに回復したが、1日3回午前7時、12時、午後4時の制限下の通行でしかない。埔里経由の道路もあるが4〜5倍の労力を要する。



1905年と1913年、2回にわたる原住民同士、タイヤル族とセディック族（頭目モナ・ルーダオ）との戦で、逃げ延びたタイヤル族の祖先たちが開拓開発した場所が谷関温泉だ。1907年に温泉が発見されたことから「明治温泉」と呼ばれ、日本時代には警察の招待所が作られたため、静かな景観が今に至っているわけだ。現在も招待所は台湾警察の保養所として管理されている。



明治温泉のホテル

今回の旅行目的の二つ目がこのお墓探しだった。谷関吊橋の袂に拵来街道の字を確認し、微妙に揺れるつり橋を渡り墓を探したが、発見できず引き返す。地震の影響で崩れ落ちた斜面部分に途中から階段ができ、拵来街道が途中で変わってしまったようだ。

谷関温泉を離れる前にどうしてもお墓を探したい一心で、友人の車に同乗し谷関観光センターを訪問し、聞いてみることにした。「谷関大橋手前から遠目で石碑が見える」との話

で、橋の袂まで来て谷関大橋の手前から眺めるが樹木に覆われてそれらしき物は見えず。橋を渡り近くから覗き込むがどうにも発見に至らず。「石碑の前を通るときは必ず、おはようございませう」と挨拶をして通ったものだ」と友人の年老いた母親から聞いた以上、絶対にあるはずだ！

観光センターに引き返し事情を話すと、職員らしき若い女性2人が案内人になってくれるという。明治大飯店の脇道から新しくできた坂道を、息を切らしながら歩いたが、先導する2人について行くのが無理な状況になってきた。持っていたスマホを若者に託し、そしてついにお墓の発見になるのだが、お墓ではなく「弔魂碑」であった。

表側は 弔魂碑 麟平書

裏側は 明治四十四年二月

二十五日 殉難

故台中庁警部 原猪治

故台中庁隘勇 寥

故台中庁隘勇 ヤボノナン



弔魂碑

昭和八年二月二十五日

有志建立

やっとこさ見つけ出した！

明治四十四年（1911）二月二十五日が殉難事故で日本人警部原猪治と隘勇（原住民との境界警備員）原住民二名が死亡したのを、23年後昭和八年（1933）二月二十五日に有志たちの手で、この弔魂碑は建立されたようだ。1930年10月には有名な霧社事件があつて、2年半後この弔魂碑が建立されている。日本人の警部と二名の原住民の隘勇がどのような事件にかかわって死亡したかは、今の時点では分からない。

しかし、「弔魂碑 麟平書」に手がかりが有りそうな気がしてくる。

麟平とは大津麟平（1865～1939）なり。肥後国出身台湾総督府官僚・県知事等。

1896年（30歳）台湾総督府に転じ、台南郵便局長、台南県内務部長、台南警察部長、総督府秘書官等歴任。

1908年6月 警視総長

1909年10月 蕃務総長に任じられる。

1911年（明治四十四年）二月二十五日 事件当日

1913年6月 病で台湾を去る。

1914年10月（49歳）理蕃策原議を発刊

1906年4月、第五代目台湾総督佐久間左馬太就任以後台湾原住民に対する引き締めが強くなってきたようだ。1913年病によって台湾を去った理由は疑問を残しているように思える。理蕃策原議に回答があるようだ。また、ネット検索の結果

「大津麟平伝」大津紀夫著もこの弔魂碑の経緯をひも解く重要な鍵のような気がしてきた。